

あ と が き

平成13年度から3年間、本校の総合的な学習領域として『みらい』を立ち上げ、独自の年間カリキュラムを編成し、子どもたちの真の学びを追究してきた。学習主体である子ども自らが、自然で具体的な学びを展開し、対象に働きかけながら自分自身との関係をつくり出していった。

そして、私たちは、そこに「学習文化の創造」を認めたのである。

平成16年度からは、『みらい』の実践研究を通して培った、子どもの特性を生かした教材の取り上げ方・単元構成・学習支援のあり方などを大切にしながら、『「意味と内容」がひろがる学びの創造 ～まなざしの共有によって～』をテーマに、各教科学習の実践研究を進めてきた。

本年度は、テーマ『「意味と内容」がひろがる学びの創造』の2年次として、「互いのまなざしが共鳴することによって」というサブテーマを設けた。「共有する」、「共鳴しあう」、「響き合う」などは、教育の中ではすでに一般化した活動様態であるが、より良く共鳴する授業づくりとは、どのような学習のけしきを想定すればいいのか、また、どのような子どもの学びをみとっていけばいいのかなど、学級風土づくりとともに様々な課題が取り上げられた。が、分かり切ったようで、実践に移すには、実はとてつもなく大きく深いテーマであったのかもしれない。

私たちは、「まなざしの共鳴」を、教師と子どもの関係だけでなく、子ども同士がお互いの考えを知り、認め合い、自分を振り返り、また、触発されるなど、かかわり合い、磨き合いながら、学びの質を高めていく相互作用だと押さえ、子どもの変容に視点を当て、子どもたちの共生・共創の喜びを探っていった。

例えば、国語部では、読みにおける自己の変容(変革・深化)を確かめるために初発の読みを大切にしている。授業の中で、お互いの考えを伝えあうことで、自分の考えを振り返り、変容を確認していく。そうすることによって、より深い読みに向かい、それが次の学習での初読みに生きると考えている。

私たちの願いは、「自己実現を目指す人間」の育成にある。子どもたち一人ひとりが自分自身の問いをもち、それを自分の力によって解決し、さらに高い問いへと導く力を育むような実践研究を積んでいきたいと考えている。

子どもたちの「学び」を中心にすえ、迷いつつ歩んできた一端が、この紀要である。ご高覧いただき、ご教示いただければ幸いである。

副校長 北 島 健 司